

芸術教育文献解題 1

Bibliographical notes 1 of the literature about the education through art

山口 喜雄, 石野 健二, 茅野 理子, 中島 望,
田和 真紀子, 村松 和彦, 株田 昌彦, 本田 悟郎
YAMAGUCHI Nobuo, ISHINO Kenji, CHINO Masako, NAKAJIMA Nozomu,
TAWA Makiko, MURAMATSU Kazuhiko, KABUTA Masahiko, HONDA Goro

1. 本研究の経緯と多領野教員による共同執筆の意義

本研究の始原は、200を越える段ボール箱収納の貴重な歴史的美術教育文献11,521点を全401頁に整備した『熊本文庫総目録』（平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究B「日本の美術教科書・美術教育文献資料のアーカイブ化に関する研究」実績報告書I／研究代表：宇都宮大学・山口喜雄／課題番号16330172）、その2.3%にあたる262点各々を600字で著した『日本美術教育主要文献解題』（同報告書II）の2007年3月末刊行に由来する。さらに2011年9月1日現在、平成19～22年度科学研究費補助金基盤研究A「美術教育文献のアーカイビングに関する発展的研究」（研究代表：宇都宮大学・山口喜雄／課題番号19203036）をアーカイビング研究会公式サイト <http://www.ae-archiving.jp/> に前研究も含め『目録』の3.6%・420点を公開している。

前後するが、一般に「解題」とは「著作者、著作の来歴や内容、出版年月等々の解説」をさす。また、「芸術」とは「一定の材料・技術・様式などによる美的価値の創造や表現の活動およびその所産」をさす。さらに、本研究における「芸術教育」とは、その創造や表現方法の教授ではなく、学習者が芸術活動に内在する主体的な営為を通して苦痛をとまわずに望ましい姿に変容する諸活動をいう。ちなみに、『芸術による教育』の著者H・リード（Sir Herbert Edward Read、1893～1968、英国の文芸批評家）によれば、視覚・造形・音楽・運動・言葉・構成の教育の各側面をもっている。

「文化芸術の振興に関する施策の総合的な推進を図り、もって心豊かな国民生活及び活力ある社会の実現に寄与することを目的」として2001年12月7日に文化芸術振興基本法（法律第148号）が制定された。文化芸術は、「人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高め」、「人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成する」ので「世界の平和に寄与」し、国際化の進展下で「自己認識の基点となり、文化的な伝統を尊重する心を育てる」と同法の理念が明記されている。

翻って、宇都宮大学教育学部における前記した各側面の教育担当者は各々の領野研究に邁進してきてはいるが、総合化をめざしての共同研究は行われてこなかった。本研究は、美術教育を軸としていた前述の7年間の成果や経験を基に、宇都宮大学教育学部の芸術教育領野に関わる多数の教員が協同し発展させていくことを企図している。（山口喜雄）

2. 芸術教育文献解題

2-1 解題『芸術による教育』



『芸術による教育』

著者：ハーバート・リード

翻訳者：宮脇 理・岩崎 清
直江俊雄

出版：フィルムアート社

出版年：2001年

教育とは何か（1章教育の定義）、芸術とは何か（2章芸術の定義）、子どもの表現は芸術か（5章子どもの芸術）など、教育や芸術の概念や意味から教師や環境のあり方（9章教師、10章環境）までを著した英国人で文芸批評家のリード（Herbert Read 1893～1968）が第二次世界大戦下の1943年に学術論文として出版した原書の宮脇理・岩崎清・直江俊雄による421頁

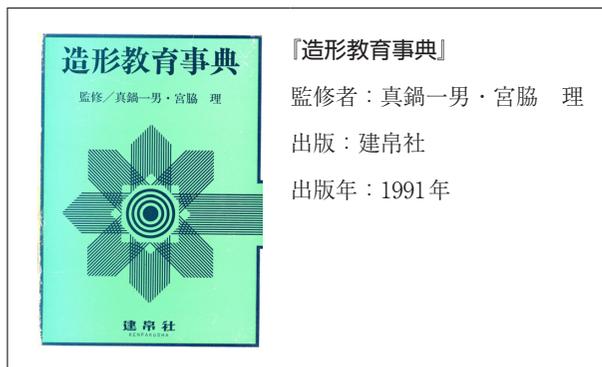
の新訳本である。

新旧訳本の違いは、大扉に付された劇作家のショー（Bernard Shaw、1856～1950）の文言が象徴的に示している。植村鷹千代・水沢孝策による1953年刊の旧訳の「芸術は、答を用いなくて人間を教育する唯一の手段である」に対し、新訳の本書は「私はただ、芸術は苦痛以外の唯一の教師であるという事実に注意を促しているのである」と訳した。

本書名『芸術を通じた教育／Education Through Art』は戦後日本の美術教育における根本理念であることは斯界の共通認識になっている。3章知覚と想像力、4章気質と表現、6章無意識な統合の方式、7章教育の自然な方式等々、読んでいくか否かでは芸術（美術）教育の授業のあり方そのものが変わってしまうほどの興味深い内容の連続である。

「本書への接近―解題にかえて」には、関連する時代背景や敗戦前後の反転期を体験した訳者と旧訳の関わり、旧訳と小野二郎（英文学者、1929～82）などが詳述され、本書熟知のために不可欠である。（山口喜雄）

2-2 解題『造形教育事典』



『造形教育事典』

監修者：真鍋一男・宮脇 理

出版：建帛社

出版年：1991年

小・中・高校での図画工作・美術・工芸ならびに幼稚園や特別支援学校での造形の指導、学部や大学院での理論研究に関する事項が693頁の一冊に網羅され、美術教育専攻生だけでなく美術を専門としない学生や教師にとっても使いやすく便利な事典である。

全国の教員養成系大学に次々と大学院・美術教育専修が設置された1991年に、修

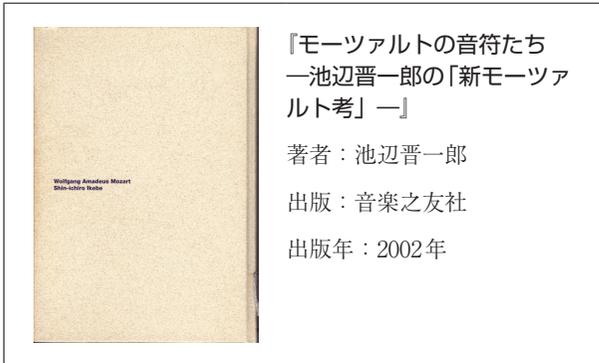
論テーマにかかわる事項の検索、研究授業立案の検証、教室に向かう直前での用語確認など多様なニーズを背景にして編集されている。

本書の特長は次の三つである。1) 単なる経験の伝達や指導法の解説ではなく、造形教育の基本概念を学問的構造化の上で明らかにしつつ、理論から実践の方法までを知的に体系化した。2) 変化する社会や子どもたちとのズレを捉えやすい動的な視座で「概説・沿革・方法・対象・内容・環境・展

望の七つの大枠組、大25・中94・小359の各項目」で構成した。3) 未来への教育を考え、従前とは異なる「展望」という大枠組を特設した。

横浜国立大学名誉教授で戦後のデザイン教育の草分け的存在の真鍋一男、元筑波大学教授で美術科教育学会代表理事など名実共に斯界の指導者両氏が監修し、当時活躍中の大学等の研究者・行政・小中高特の実践者・院生など118名が執筆した。当時の若手執筆者が20年後の今日、学的研究や授業研究の中心的な指導者になっていることから本書の信憑性が実証されている。(山口喜雄)

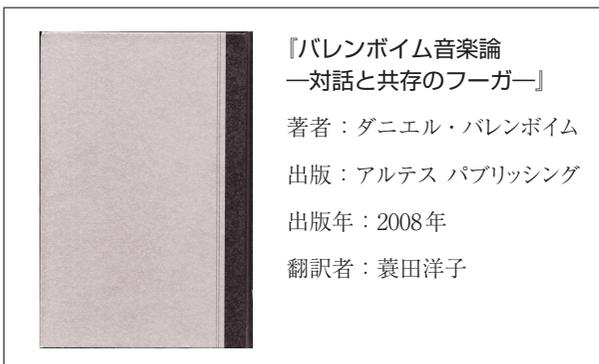
2-3 解題『モーツァルトの音符たち—池辺晋一郎の「新モーツァルト考」—』



雑誌『音楽の友』に連載された『モーツァルトの音符たち』は、国際エミー賞、芸術祭優秀賞、尾高賞等を受賞し、純粋器楽作品からオペラ、バレエ、ミュージカル、映画、TV、演劇等幅広い分野で作曲活動をしている作曲家池辺晋一郎氏によるモーツァルト論である。その内容は一般の読者に向けたもので、音楽の専門的な知識がなくても理解できるように工夫さ

れている。ふつう作曲家論は音楽学の研究者によるものが一般的であるが、広範な視野を持つ現代作曲家としての立場からの具体的なモーツァルト論となっている。全24章からなり、モーツァルトの代表的な名曲20曲の音楽的魅力が独自の観点で分析されている。所々でモーツァルトを音楽史上最高の天才と言っており、旋律、和声、構造等をとおして一般の人にわかりやすくその天才性を描き出している。その手法が極めて簡明であるため、モーツァルトの音楽の持つ内容の独自性の解読には一見不十分であるかのようだが、それは音楽学者というより現役の作曲家としての立場で書かれているためであり、音符を通したより現実的で実際の音楽論となっている。様々な音楽情報があふれ価値観の多様化が言われる現代において、モーツァルトの人気は衰えてはいない。モーツァルトを知ることが音楽の在り方の原点を知ることであり、また、人間と芸術の関わり方を知る上で不可欠のことと言えるだろう。本著がその一助となることは間違いない。(石野健二)

2-4 解題『バレンボイム音楽論—対話と共存のフーガー—』

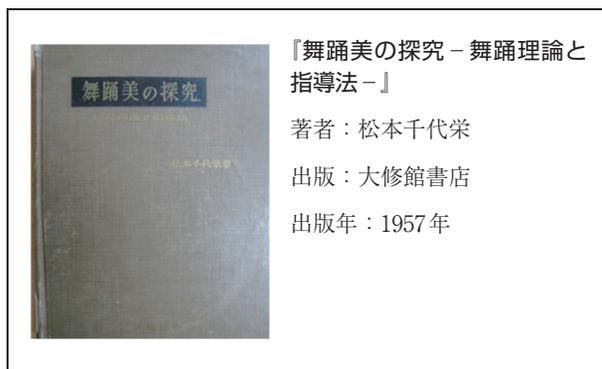


ダニエル・バレンボイムは幼少時より音楽の天才性を発揮し、現在ピアニストとして、また、指揮者として世界的な活躍をしている。ロシア系ユダヤ人としてアルゼンチンに生まれ、現在はイスラエルに在住し、ユダヤとパレスティナの問題に直面している。本著は現代社会に生きる我々が音楽にいかに関わるべきかについて、また、社会問題を切り開く音楽

の可能性について論じているという点で、単なる音楽論を超えたものとなっている。

著者は、音楽を聴く力を導き育てることは、個々人の発達にとってだけでなく、社会が、ひいては国政がうまく機能するためにも、我々の想像をはるかに超える重要性を持つとしている。そして音楽の想起する能力、そして、フーガの主題の幾何学的な変奏を認識する聴覚の技能、能力の蓄積作用によって、同時にいくつもの意見に耳をかたむけ、理解するようになり、社会や歴史の中での自分の立場を適切に判断できるようになり、また、すべての人びとの間に相違よりも類似を見出そうとする態度が育まれるとしている。その実践として、イスラエル、パレスティナ、そして他のアラブ諸国出身の音楽家たちを呼びあつめてオーケストラを結成し、そこでの様々な演奏活動を通じてパレスティナ問題の解決の糸口を探っている。現代における音楽の創造的なあり方を実践的に探究するという意味で、まさに稀有な音楽論である。(石野健二)

2-5 解題『舞踊美の探究－舞踊理論と指導法－』



昭和22年に示された“学校体育指導要綱”により、日本の舞踊教育は、「従来の教授中心の形態から脱し、児童、生徒の自主創造性を重んじる新しい、且、本来あるべき方向に立つに至った。」著者である松本は、26歳でこの要綱作成委員となり、創作ダンスを提唱して、戦後の舞踊教育の中心的柱となり、数多くの先駆的研究、研究者を輩出した。本書は、松本

の最初の著書であり、その後続く『ダンス表現学習指導全書－表現理論と具体的展開』（1980）『ダンスの教育学』全10巻（1992）『松本千代栄撰集』（2008-2010）の原点となるものである。内容は、前編を「舞踊美の探求」として、「舞踊そのものの発展、舞踊美の特質、表現の構造や表現の効果の問題をとりあげて舞踊の本質を究明し」、後編を「教育への活用と指導法」として、「舞踊が人間形成にどのように役立ちうるかに重点をおいて、それを方法につなぐようにつとめ」たと述べている。その理論的背景には、ウィスコンシン大学に於いて、アメリカの大学ではじめてのダンス専攻のコースを設置したM.N.ドゥブラーの“DANCE A CREATIVE ART EXPERIENCE”（邦訳『舞踊学原論－創造的芸術経験－』）がある。その理念は、第7章「舞踊の教育的意義」に掲げられた以下の3点に反映されている。すなわち、舞踊は身体による美の形成である、舞踊は、新しい美的経験による自己形成である、舞踊は、身体的、美的経験によって、生活を高揚させるものである。(茅野理子)

2-6 解題『芸術とは何か』

S. K. ランガーはアメリカの哲学者、美学者であり、芸術哲学の代表者の一人である。その学問的立場は、イギリスの哲学者A. ホワイトヘッドとドイツの哲学者エルンスト・カッシーラーの影響に拠るところが多いとされている。本書は、「シンボルとしての芸術の意味、表現とはなにか、芸術的創造の問題など芸術の本質に関する基本的な概念を明らかにした十回の講演からなるもの」である。特に、第1章「ダイナミックなイメージ、舞踊に対する哲学的考察」において、様々な芸術の中から舞踊を取り上げ、「舞踊は一つの『現象』である。または一つの仮象と言ってもよい。それは舞踊家の動きから生まれてくるが、単なる動きだけではない」とし、「ダイナミックなイメージ、これが舞踊



『芸術とは何か』

著者：S.K.ランガー

翻訳者：池上保太・矢野万里

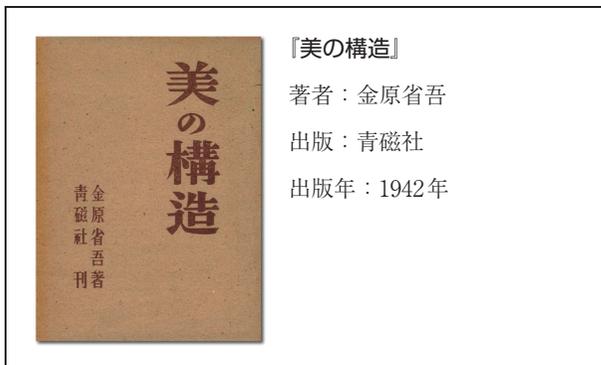
出版：岩波新書(岩波書店)

出版年：1967年

である」と定義している。舞踊は、「人間感情の本質を表現するところの知覚できる形式である」とし、「舞踊を観るとき目にするものは、たがいに作用しあう力の展開である」とする、「知覚」の上から舞踊をとらえ、「力」の作用に舞踊の特質を見ている点にランガーの独自性がある。最後に述べられている言葉は、興味深い。「人間性の最初の客観化、つまり、最初の

真の芸術は、舞踏なのである。」(茅野理子)

2-7 解題『美の構造』



『美の構造』

著者：金原省吾

出版：青磁社

出版年：1942年

日本に芸術が栄えて久しい。日本の芸術は、音楽も美術も文学も、あるいは茶や花、舞踊といった日本独自の藝術といえる藝道にあっても、それらは“開いた形として成立”しており、決して単独にあるものではない。また、それらは常に“その地位を一步退き、そこに和の空間を作り、その空間において周囲と共にある”と。(『日本藝術論』昭和18年初版)

金原省吾は、武蔵野美術大学の前身・帝国美術学校の創立者の一人。長野県師範学校、早稲田大学に学び、昭和三十年、『絵画に於ける線の研究』によって文学博士(早稲田大学)の学位を受けた。東洋美学者として著名な氏であるが、アララギ派の歌人としても知られ、何より国語教育とのかかわりも深い。『構想の研究』は、その最初の著作として昭和八年に刊行された。

日本の藝術には様々な見方があるものの、本書は仏像を中心に、飛鳥から平安に至る代表的なものから、今日的「美」の概念を根本から問い直す一冊である。氏の論考は、氏のいうところの“和の構造”そのものであり、一貫して“閉じた形ではなく、直に次の形成を入れる”立場に居るといってよい。

その他、主な著書に『美の生活(生活科学新書)』、『東洋美術論(大日本雄弁会講談社)』、『美術の記(青磁社)』がある。どれも日本の歴史的、文化的構造の解明を試みるには必読の書となる。(中島望)

2-8 解題『物と美』

柳宗悦は、河井寛次郎、浜田庄司らと共に民藝運動を起こし、その中心となる指導者であった。「民衆の工藝品=民藝」は、この三人によって大正十四年に生まれた言葉である。

今日の芸術世界に多く見られる誤謬は、西洋の眼で日本の芸術を眺めることの病からである。

“非凡を好む人々は、「平易」から生まれてくる美を承知しない。それは消極的に生まれた美に過ぎない。”喜左衛門井戸を健やか明快に論じた一文である。そして、美を保証するものは何か。氏の著作は、しばしば近代日本の宗教論の一例としても採り上げられ、人人の内に、また対象となる物の中



『物と美』

著者：柳 宗悦

出版：春秋社

出版年：1960年

書の世界であるが、本書に収められた「書論」は実に明快かつ具体的に論じられている。そもそも書には、公的・私的、古典性・現代性、美術性・工芸性といった多様な性格があり、やはり西欧のいう「芸術＝アート」とは異なる。東洋に自生し、今は個人表現が主となる書を検証する意味において、必読の論考である。(中島望)

にも美仏性を見出す。また、氏のいう「悲願」は、実に理論と実践の伴うものであり、今日の日本の芸術に警鐘を鳴らし続けている。

“美とは何か、というような問が起こること。それはきわめて現代的な現象である。”水尾比呂志『東洋の美学』を併せ持ちたい。

ところで、今や個人作家のみが所有する

2-9 解題『日本語の歴史 青信号はなぜアオなのか』

『日本語の歴史
青信号はなぜアオなのか』

著者：小松英雄

出版：笠間書院

出版年：2001年

本書は、日本語の歴史を解明するために数多くの専門書を著してきた著者が、「日本語の歴史とは、こんなにおもしろいものだったのだ、日本語の歴史は役に立つ知識だったのだと、みんなに理解してもらいたい。」という熱意から執筆した「日本語史入門」の書である。

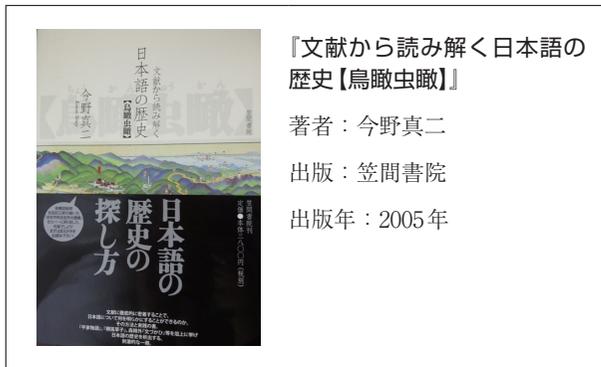
しかし、本書のあり方は、従来の日本語史の概説書とは異なる。従来の日本語

史の概説書が日本語の歴史的事実を列挙し日本語の歴史そのものの記述を目的とするのに対し、本書における「日本語の歴史」とは、あくまでも現代日本語を深く理解するためのものであり、「軸足を現代日本語に置き、身近な疑問を着実に育てることによって、日本語の運用原理を明らかにする」ものだからである。

このような本書のあり方を副題の「青信号はなぜアオなのか」は象徴的に示している。これは本書5章の「日本語の色名」のテーマであると同時に、本書全体のテーマ—現代日本語の身近な疑問を出発点とし、歴史の流れの中で、日本語の運用原理を明らかにする—を実践的に示すものである。ちなみに、青信号・赤信号は、日本の色名の伝統的な体系(特に「赤紫蘇」「青紫蘇」のような「赤」とのセット)に基づいて命名されているという。このように身近なことばにも体系性が潜んでおり、この日本語の体系を継承するのも変化させていくのも、実は日本語の歴史の流れの中で生きる我々日本語話者自身であることに、本書は気付かせてくれるのである。(田和真紀子)

2-10 解題『文献から読み解く日本語の歴史【鳥瞰虫瞰】』

本書は、徹底的に日本語の歴史的な文献に密着し、そこに記された日本語の実態の掘り起しとテキスト間の比較を行うことによって、日本語の変化—歴史を構築しようとするものである。



『文献から読み解く日本語の歴史【鳥瞰虫瞰】』

著者：今野真二

出版：笠間書院

出版年：2005年

「日本語の歴史」というと、文法の変化や音声の変化をはじめとした体系的な大変化について論じられることが多いが、そういった大変化も小さな変化の膨大な積み重ねと考えられる。大変化を形成する小さな変化の有様を具体的なテキスト比較から追っているのが本書である。本書の副題にある【鳥瞰虫瞰】とは、幅広い時間幅での体系的变化を見渡す巨視的は

鳥の視点—鳥瞰—によって見通し（仮説）を持ち、具体的なテキストをあるがままに観察する微視的な虫の視点—虫瞰—で日本語の歴史的な知見を得ようとすることに由来している。

なお、本書の構成は「手書きから印刷へ」という配列になっており、「手書き」のテキストに平家物語、「手書きから印刷」への過渡期のテキストに御伽草子『横笛滝口草子』、近代的な「印刷」によるテキストに明治期の諸テキストを取り上げている。また、本書のユニークな点として、あたかも著者とともにテキストを読み進めているかのような文章展開と豊富な資料が挙げられる。本書では「虫瞰」でテキストの変化を視覚的に追いながら、同時に「手書きから印刷へ」という構成を辿ることで、文献の伝わり方の変化がことばの変化の質の変容に関わっていくことを実感できるのである。（田和真紀子）

2-11 解題『クール・ルールズ』



『クール・ルールズ』

著者：ディック・パウンテン
デイヴィッド・ロビンズ

翻訳者：鈴木 晶

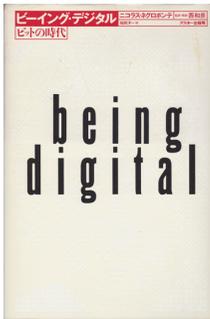
出版：研究社

出版年：2003年

〈クール〉という言葉は、ホット（熱さ）に対する温度としての冷たさという意味だけではない。筆者によるクールの定義は、「〈クール〉とは、個人や小集団が、権威—親であろうと、教師や警察やボスや刑務所長であろうと—への反抗を表わすためにとる敵対姿勢である。（p.24）」としている。そして、「人間の行為や文化の産物—話し言葉やダンス、映画やテレビ番組

組、本や雑誌、音楽、服装、絵画、車、コンピュータ、オートバイ—の中で、ある事象を目にしたときに、そこに〈クール〉の影響が見られるような事象をすべて〈クール〉と見なそうということである。（p.22）」と述べている。また、別の文脈において、「さらなる仮説を立ててもいいだろう。すなわち、まさしく〈クール〉こそ、短絡的で不適切な比較をせず、鬱にならないために用いるメカニズムである。（ジェームス自身はそのことには触れていないが）。学校の成績が悪く感じたり、社会的に「適応」できなかったりする生徒は、学校の活動に参加しないという戦術をとり、自尊心を保つ代替方法を与えてくれる反学問的な徒党、あるいはサブカルチャーを作り出す。（p.226）」とする。〈クール〉をキーワードとして時代を読み解く本書は、芸術や芸術教育に携わる者が一度は目を通しておくべき本と考える。（村松和彦）

2-12 解題『ビーイング・デジタル』



『ビーイング・デジタル』

著者：ニコラス・ネグロポンテ

監訳・解説：西 和彦

翻訳：福岡洋一

出版：アスキー出版局

出版年：1995年

本書は、1995年の出版当時、MIT（マサチューセッツ工科大学）のMedia Lab（メディア・ラボ）創設者で、その所長でもあったニコラス・ネグロポンテによる古典的名著である。筆者の楽観主義やITバブル崩壊による落胆から本書への批判はあるが、そこに記されている内容は、現在その多くが現実のものとなり、通底するものは今なお揺るがない。現在、デジタル

化の波はテレビのアナログ放送の終了や教育現場の電子黒板やデジタル教科書の導入など、目に見える形で生活に押し寄せている。このような状況あって、芸術教育においても「デジタル化すること」とは何なのかをつかんでおくことが必要であろう。

本書の中心となるテーマは、アトム（物質）からビット（情報）を中心とした世界に変わることによって、生活に何がもたらされ、どのような影響を受けるかということにある。本書全体は、大きく「ビットはビット」、「インターフェイス」、「デジタル・ライフ」の3つのパートから構成されており、いずれもデジタル化について書かれてはいるが、専門家、もしくはオタク（nerd）向けの解説書ではなく、誰でも楽しく読める内容になっている。直接的に芸術教育に係る部分は、p.302からの「第18章 電子表現主義者たち」に述べられている。

メディア・ラボを離れた今もMITの教授であり、様々なところに子どもたちへの教育が語られている本書の一読を勧めたい。（村松和彦）

2-13 解題『画材の博物誌』



『画材の博物誌』

著者：森田恒之

出版：中央公論美術出版

出版年：1994年

絵を描こうと思いついて画材店に行くと、その種類の多様さに驚いたという話を聞く。つまり、画材の選択が絵を描く前の最初の関門となっている。本書は、様々な画材の成り立ちや性質を分かりやすく解説し、表現効果（完成された作品にみられる表現ではなく、制作過程における絵の具の効果）との関連を示している。

本書の構成として、「絵具」とは何かという絵具の定義や絵画の物質的な構造の解説から始まり、鉛筆、クレヨン、水彩などの学校教育の授業で用いられている材料やメタルポイント、ビスタ、羊皮紙といった一般的には馴染みの薄いものまで取り上げている。また、それぞれの画材が項目として記載されているため、興味のある項目（画材）から読む事もできる。項目の一例として、紙についての記述の中には、同じ画用紙と呼ばれているものでも専門家用と学童用における材料や製造上の差異について触れており、興味深い。

このように画材の背景や性質を知ることで画材選びの観点を持つ事のみならず、画材に対する愛着や絵画制作に際してのイメージの具体化に繋がる事が期待される。また美術館での絵画鑑賞について、

材料面からの深い読み取りが可能になる。

著者の森田恒之氏は、本書の他、『絵画表現のしくみ』といった著書もあり、画材の具体的な使用法の解説や、現代作家のコメントを通した画材と表現の関連を示しており、本書と合わせて読むと更なる実技面での充実に繋がるといえる。(株田昌彦)

2-14 解題『絵画の制作』



『絵画の制作』

著者：小澤基弘

出版：花伝社

出版年：2001年

どこまで描けば絵画は完成するのか。本書は多くの方が疑問としている難題に一つの解答を導き出し、絵画制作の理念を提起している。著者の小澤基弘氏は作家であり、埼玉大学教育学部で絵画の実技指導にも携わっている。本書は、自身の制作や絵画についての考え方を客観的にみつめ深める契機となったと氏が語っている文化庁芸術家在外研修員としてパ

りに滞在した時期に執筆されている。

まず、氏は制作の根幹をなすものとしてドローイングを挙げている。ドローイングは氏が美術大学に在籍した当時から日々描き続けており、タブローの為に描くものではなく一つの確立されたジャンルとして位置付けている。それらの羅列を概観することによって技術的な変遷及び表現内容の核となるものの普遍性が見えるという。つまり、氏にとって作品は個々に完成させるものではなく、連続的な行為に価値を置くものであり、それを顕著に示しているのがドローイングであると述べている。

この考え方の他の例として、ジャコメッティの制作記録を例示し、制作過程での創造のプロセスについて触れ、描画行為とは自己の中の新たな感覚を発見し強化するための行為であると述べている。その裏付けとして、ガントナーが提唱するプレフィグレーションの概念を導入し、「未完成の完成」を氏が述べる所での内的完成(理念の成就)である導いている。つまり、仕上げる事が完成ではなく、制作者の表現意図が表出することが完成であり、その時に巡り会うために試行錯誤が繰り返されるのである。

本書は、絵画制作で悩んでいる学生や美術教師を目指す方に一読していただきたい。仕上がった作品を見るのではなく、作品をつくる過程で作者が何を感じ考えたかが重要であることに気付かされるのである。(株田昌彦)

2-15『美術による人間形成 一創造的発達と精神的成長』

オーストリアのユダヤ系の家庭に生まれたV・ローウェンフェルド(Viktor Lowenfeld、1903 - 1961年)は、ウィーン大学で美術史や心理学を学んだ。その後、1938年には、ナチスの侵攻を避け、イギリス経由でアメリカへ渡り、美術教育に関する研究を深め、1946年にペンシルヴァニア州立大学で美術教育学の講座に着任した。その翌年に刊行された“Creative and Mental Growth”は自身の主著であるばかりか、戦後の美術教育研究において、世界的に最も影響力のある著作と看做されている。邦訳は『美術による人間形成』の表題で1963年に刊行された。当時の日本の美術教育の理論と実践にも貢献し、今日も尚、図画工作科、美術科の教育研究における重要な基本文献のひとつに数えられる著作



『美術による人間形成
—創造的発達と精神的成長』

著者：V・ローウエンフェルド

訳者：竹内清・堀内敏
武井勝雄訳

出版：黎明書房

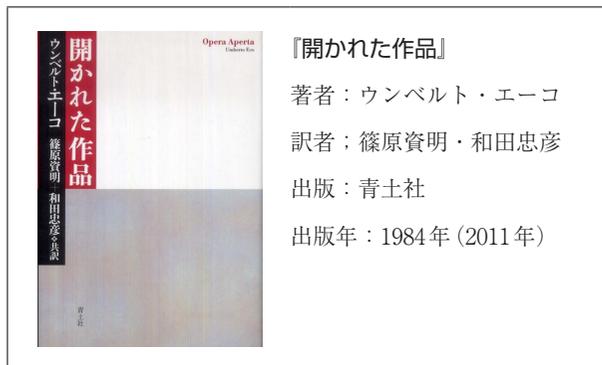
出版年：1963年

である。

ローウエンフェルドは、美術を子どもの知能と情緒とのバランスを調整するものと捉え、人間形成への重要な働きを肯定した。その美術教育論は、子どもの造形活動の発達段階と心理的な側面の探究を基軸とするもので、本書では幼児から青年に至る長い発達の過程に詳細な検討を加え、その上で各発達段階における造

形活動への動機付けに言及している。例えば、子どもの表現には、大人目から見ると不自然な形や関係性があっても、子ども目からは正しい場合がある。ローウエンフェルドは美術教育において、子どもの内発的な表現を尊重し、その上で発達段階に即して児童の関心を高める適切な刺激を取り入れることを重視した。(本田悟郎)

2-16 『開かれた作品』



『開かれた作品』

著者：ウンベルト・エーコ

訳者：篠原資明・和田忠彦

出版：青土社

出版年：1984年(2011年)

イタリアの美学・哲学者ウンベルト・エーコ (Umberto Eco, 1932-) は、『開かれた作品』で、音楽、文学、美術などを例に芸術作品全般の問題として、自身の提唱する「開かれた作品」の概念を論じている。この論及は、ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857- 1913) の記号論を前提に記述された。記号論において、対象物は意味表現 (signifiant) と意味内容 (signifié)

とに分けられ、本来、恣意的に結びついているかのような意味表現と意味内容のうち、意味内容には曖昧性があり、そこに作品享受者の介入で多様な意味内容が発見されるとした。

エーコによれば「芸術作品は曖昧なメッセージ、単一の意味表現の中に共生する多様な意味内容」である。芸術作品は、一義的に固定された意味だけでなく、享受者、解釈者によって実現される豊かな読みの可能性を備えている。ただし、エーコは、聴衆、読者、鑑賞者の完全に恣意的な解釈に作品が委ねられているとしたのではなく、あくまでも、芸術作品には、作者によりあらかじめ規定された構造内での読みの可能性が開かれていることを論じた。

すなわち、「作品の開かれ」とは、あらゆる芸術作品に内在する多様な解釈の可能性である。また、このことは、芸術教育における鑑賞で、作品に向き合う学習者による再創造のプロセスを理論化するものである。作品を享受する児童生徒一人一人の創造性を保障する根源であるとも言えよう。(本田悟郎)

3 芸術教育文献解題を通じた研究の可能性

最後に、紙幅の都合で詳細は略すが、学習のコアとしての芸術教育あるいは現代の環境への対応に関する芸術教育の有意性について二人の言説を紹介しておきたい。

後にベルリン大学学長となるヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770 ~ 1831、ドイツの哲学者) が、長かったギムナジウム (高校) 教員経験から、哲学の教育以前に芸術・宗教・古典の教育の必要性を強調したことが、ヘーゲルのアカデミー版全集 (Gesammelte Werke, hrsg. von Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaft) の10巻 (「ギムナジウムにおける哲学の授業について。イマニエル・ニートハンマーに宛て私的所見 1812年10月23日付」827 ~ 828頁) に記されている。

2011年3月11日の東日本大震災・津波・原発事故、同年8月25日発生的大型で強い台風12号は各地で記録的豪雨を生じ、9月4日奈良県上北山村の累計雨量は2433mmに達し、ニューヨークの2年分、北京の4年半分の雨量がわずか1週間に降るという想像を絶する被害を引き起こした。地震や台風などの災害対策は、科学技術に頼らざるを得ないと一般的には考えられる。では、私たち芸術教育関係者には何ができるであろうか。

中学1年生宛の「美術を学ぶ人へ」と題して、彫刻家の佐藤忠良 (Sato, Tyuryo, 1912 ~ 2011) が次のように記述している。「科学をもとに発達した科学技術が、私たちの日常生活の環境を変えていきます。ただ、私たちの生活は、事実を知るだけでは成り立ちません。好きだとかきらいだとか、美しいとかみにくいとか、ものに対して感ずる心があります。これはだれもが同じに感ずるものではありません。しかし、こういった感ずる心は、人間が生きていくのにとっても大切です。だれもが認める知識と同じに、どうしても必要なものです。詩や音楽や美術や演劇——芸術は、こうした心が生み出したものといえましょう。この芸術というものは、科学技術とちがって、環境を変えることができないものです。しかし、その環境に対する心を変えることはできるのです。詩や絵に感動した心は環境にふりまわされるのではなく、自主的に環境に対面できるようになるのです。」(『少年の美術』現代美術社、1981年、4頁)

本研究は端緒についたばかりである。ヘーゲルが強調した哲学を支える芸術学習、佐藤忠良がいう自主的に環境に対面できる心を培う芸術学習に達することは、容易ではないであろう。けれども、共同研究によって各分野での個別の研究では感得できない研究の質的向上の可能性を追究していきたい。(山口喜雄)

付記

- 1) 「芸術教育文献解題1」は、研究代表者、山口喜雄の企画・発案によるもので、本論の編集は、本田悟郎が行った。全執筆者名は、文頭に記載のとおりである。
- 2) 各解題の執筆者名を解題ごと文末に記載した。
- 3) 解題にあたった文献の名称、著者名、出版社、出版年等は、それぞれ文中の図版に添えて記載した。

